

## “橋の下” をつくる ということ

ぼくには忘れられない場所がある。勉強がいやでいやでしようがなかつた高校時代に、授業をさぼつて訪れていた「橋の下」。川幅は20メートルくらいだろうか。夏の暑い時期には、角がとれた大きめの石が顔を出し、膝小僧くらいまで伸びた雑草が生い茂る。草を追いやしながら川面を目指して進んでいくと、乱暴に塗り固められたコンクリート護岸が顔を出す。「ぼくの場所」だ。頭上を通り過ぎる車の音と、目の前にただよう穏やかな波紋。橋のたもとの自販機で買って来た缶コーヒーをちびちびと飲みながら、ぼくはひとりになれた。時には友人と一緒になってきた。「川行こうぜ」という一言が、ぼくらを解放してくれる合い言葉だった。

いつしか、こんな場所を作りたいと思うようになつた。建築に興味を持っていたぼくは、この「橋の下」を「デザインしたい」と強く思うようになる。自分の拠り所であり、逃げ場でもある場所。消化しきれない不安や根拠のない夢を、静かに、黙つて包み込んでくれる場所。

ぼくのこの気持ちが決定的原因のは、ある出来事が起こつたことによる。大学進学のために故郷を離れ、数年ぶりに訪れた時だ。そこで衝撃を受ける。きれいになつていたのだ。周囲の雑草は丁寧に刈られ、小さな子どもでも安全に遊べるスペースとなつていた。さらに柵ができていた。「橋の下」に入れなくなつていた。

やでいやでしようがなかつた高校時代に、授業をさぼつて訪れていた「橋の下」。川幅は20メートルくらいだろうか。夏の暑い時期には、角がとれた大きめの石が顔を出し、膝小僧くらいまで伸びた雑草が生い茂る。草を追いやながら川面を目指して進んでいくと、乱暴に塗り固められたコンクリート護岸が顔を出す。「ぼくの場所」だ。頭上を通り過ぎる車の音と、目の前にただよう穏やかな波紋。橋のたもとの自販機で買って来た缶コーヒーをちびちびと飲みながら、ぼくはひとりになれた。時には友人と一緒になってきた。「川行こうぜ」という一言が、ぼくらを解放してくれる合い言葉だった。

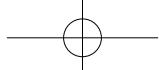
いつしか、こんな場所を作りたいと思うようになつた。建築に興味を持っていたぼくは、この「橋の下」を「デザインしたい」と強く思うようになる。自分の拠り所であり、逃げ場でもある場所。消化しきれない不安や根拠のない夢を、静かに、黙つて包み込んでくれる場所。

ぼくのこの気持ちが決定的原因のは、ある出来事が起こつたことによる。大学進学のために故郷を離れ、数年ぶりに訪れた時だ。そこで衝撃を受ける。きれいになつていたのだ。周囲の雑草は丁寧に刈られ、小さな子どもでも安全に遊べるスペースとなつていた。さらに柵ができていた。「橋の下」に入れなくなつていた。

橋脚には、当時の落書きがそのまま残っている。手を伸ばしても届かない落書き。湿っぽい、静かな、一人になれる「ぼくの場所」がきれいさっぱり、なくなつていたのだ。

「橋の下」を「デザインしようと公共空間のデザインを勉強していたぼくは、この事実を深く思索するようになる。ぼくのような悪ガキや浮浪者が溜まらないよう、柵ができ、安全に遊べるようになつた周囲のスペースを住民たちは喜んで受け入れている。一方、ぼくの喪失感はとてもとても大きいものだつた。

行政が管理しているという意味では確かに公共空間である。でも、そこに張り付いている全ての想いは、「私的なもの」ではないだろうか。人数の大小に関わらず、ある場所に対し切実な想いを抱いている人たちがいる。「公共の」デザインでその人たちを救わないとしたら、いつたい誰が救うのだろう。「みんなに優しい」「みんなのため」：当たり前のように、そんな枕詞のついた行政の施策。そして、より多くの人たちを見据えて、最大公約数で落とし込むデザインが「良い」とされている現状に、ぼくは強い違和感を覚えたのだ。果たして、これがぼくの目指すべきことなのだろうかと。今後、生活者の価値観はますます多様化していく。その中で「公共の」デザインが担うべき役割は、大多数の人たちを喜ばせたり樂しませたりするよ



りも、少数の切実な想いを救い、時には弔う嘗みが必要になってくるに違いない。10年以上前に抱いたこの想いは、今でも全く変わっていない。

思索する中で、さうに気付くことがあった。それは「橋の下はデザインされていなかつた」という事実である。耐荷重や「橋の上」で過ごす人々の有り様で橋の形状が決定し、より多くの人たちの動線や河川流量等を勘案して河川敷がデザインされる。いわば、ぼくが最も大切に思えた「橋の下」は、「デザインされていなかつたのだ。デザインされていなかつたからこそ大切に思えたのか、という点はさほど重要ではない。重要なのは、作り手と関係なく、ぼくが大切な場所と「見立てた」事実である。

デザイナーや管理者の意図に関わらず、ぼくらは、世の中の全ての空間を自由に操ることができた。頭の中で、あるいは身体で、ぼくらは様々な不確定な要素に影響されながら、「自分の場所」をつくりだすのだ。例えば「あの場所には、浮浪者がよく溜まる」と書かれた雑誌を見れば、そこへデートに行きたいとは思えないだろう。朝、自宅でコーヒーをこぼしてお気に入りのラグを汚してしまったら、その日はどんなに美しい風景を見ても心が動かないかもれない。ぼくらは、その場のデザインのみで、空間から束縛され、開放されているわけではない。



田北雅裕（たきた・まさひろ）

感性価値クリエーションコース講師。  
専門は地域文化デザイン、まちづくり、景観計画、情報デザインなど。

つまり、住民の立場に限りなく歩み寄ると、その場を物理的に「デザインするスキルだけでなく、メディアやコミュニケーションで空間を見立てる、暮らし」という文脈の中で感情を揺さぶるスキルも必要なはずなのだ。それ以来、ぼくは、手段を限定しないかたちで、空間やメディア、そしてコミュニケーションの在り方等、一般的に「デザイン」と呼ばれる範疇を越えようと行動し始めた。

ぼくはおそらくこの先も変わらない。やりたいのは「デザインではなく、「橋の下」をつくることなのだ。

ぼくはおそらくこの先も変わらない。やりたいのは「デザインではなく、「橋の下」をつくることなのだ。

ぼくは、その営みを「まちづくり」と呼んでいる。「まち」の住民となること。限りなく当事者＝ユーザーとなり、振る舞うことだ。大切なことは、より多くの人たちのために、自分の美意識を捨て、また、少数派の他者の美意識を無視することではない。むしろ、自分の美意識、感性に正直であることだ。家族や恋人との暮らし、そして幼き頃の想い出。自分自身が当事者となり、その事実から目をそらさないことだろう。その上で、他者を思いやりながら、異なる美意識を摺り合わせていく。そのため、自分が持っているスキルではなく、最終的に目指す結果や状況から、手段を選択することがあってもいい。摺り合させた結果、他者に全てを託してもいい。